

ヤドカリグループの活動

赤碕保育園（鳥取県東伯郡）

にじぐみ「ヤドカリグループの活動」（4,5 歳児）

海のテーマ活動の初回の日（5月14日）、クラスの子どもたちで三度笠¹の海岸へ園外保育に行った時、ヤドカリを見つけ捕まえた子どもたちがいた。そのヤドカリを保育園へ持ち帰り、子どもたちと話し合った結果、クラス内でヤドカリに興味を持っている4・5歳児6名で飼育することとなった。その飼育の過程で、子どもたちは飼育する方法を思考錯誤しながら自分たちで考えたり、また調べてみたり、毎日のお世話の中でヤドカリの様子を観察したり、そして、それまでお世話をしていたヤドカリが死んでしまった時には、「命」について考えたりと様々な体験をしてきた。こうした様々な体験をしてきた活動であったが、以下に挙げる事例は、その中でも特に、子どもたち自身の探求心、創意工夫、そして、ヤドカリに対する思いが強く表れているものである。

・保育士の願い、援助、環境構成 ○子どもの姿・つぶやき、発言

1. ヤドカリをクラスで飼うの？飼わないの？（5月上旬）

- 園外保育のときに捕まえたヤドカリであったが、その場では、クラスで飼っていくのかどうか話し合いはしなかった。この日の帰りの会の時にクラスの子どもたち全員で話し合うこととなった。ところが、「飼ってみたい」という意見だけでなく、
「ヤドカリのお父さんとお母さんのところに返してあげたほうがいい」「広い海に返してあげたほうがいい」



という意見も出て、話し合いはまとまらなかった。そこで、保育者としては、子どもたちのこうした気持ちも大切にしていきたいと考え、子どもたち自身が、生き物を飼うことについてどのように飼っていけばよいのか深く考えたり、ヤドカリに対してクラスで飼うことが本当に幸せなことなのかどうか考えたりして欲しく、週明け月曜日までに**「飼うのか、飼わないのか、また、飼うならばどうやって飼ったらいいのか考えてきてみようか」**と投げかけることにし、休みの間は、保育者が責任を持って飼うということで帰りの会での話し合いを終えた。

- 休み明けの子どもたちとの話し合いでは、
「池にいれて飼えば？」「海の水じゃないといけん」「海の水が好きだけん」
「川や池はいけんと思う。死んじゃうかもしれん」

との意見が出てきた。

- 子どもたちは、園外保育へ行ったときに、海の水をなめてみていた経験から、海の水は塩からく、池の水は塩からくないことに気づいていた。こうした海水と淡水の違いに気づいた子どもたちの感覚を大切にしていきたいと考えていたが、さらに、休みの間に保育者が水かえをしておいた海水のにおいがくさいことに気づいた子どももいた。

- **「八橋²の水はくさい」「三度笠の水はくさくない」「三度笠の水を取りにいったほうがいい」「でも遠いけえらいよ³」「休みの日はどうする？」「塩と水で作る」**



- ここまでで、話し合いの方向がヤドカリの水のことになってしまったため、子どもたちのこうした気づきを大切にしていきながらも、保育者がもう一度、飼うのか、飼わないのかという最初の問題へ話を戻すことにした。この時点でも子どもたちの間では結論がでなかったが、その中で、年長児が、
「多数決かじゃんけんで決めればいい」という意見を出してきた。そこで、保育者が**「多数決で決め**

1 正式名称「波しぐれ三度笠」のこと。赤碕町（現在、合併のため琴浦町となる）のシンボリックな場所であり、そこにあるオブジェの名称。

2 鳥取県東伯郡琴浦町八橋海水浴場のこと。

3 「大変だよ」という意味。鳥取県地方の方言。

てもいい？」と子どもたちに問いかけてみたところ、それでいいということになったため、多数決をし、飼うこととなった。また、これから子どもたち自身で飼っていくため、飼育方法について、子どもたち同士で話し合っただけで済ませたいと考えたため、さらに話を進めていった。

○ 「水は毎日とりかえる」「でも毎日、水を取りに行くことはできないよ（保育者の発言）」「海の水をなめて味がわかるから、塩と水で作る」

- ・ この「塩と水で海水を作ってみる」という子どもの意見で子どもたち同士の話がまとまり、毎日、責任を持ってお世話をするといった9人の子どもたち（年長児4人、年中児5人）がヤドカリグループとして活動を始めることとなった。保育者としては、「舐める」という五感を通しての海水に対する子どもたちの気づきを大切にしていきたいと、また、子どもたち同士で十分に話し合った結果を尊重していきたいと思い、今後の飼育活動を見守っていった。

2. ヤドカリを飼ってみようパート1（海水を作ってみる）（5月中旬）

- ・ こうして、9人のヤドカリグループの子どもたちが主となってヤドカリのお世話が始まった。水かえについても、子どもたちが気づくまで保育者としては声をかけないようにするなど、子どもたちの自主性を大切にしていた。また、水の量や塩の量がわかるように、水をくむペットボトルにマジックで線を引き、塩を入れるためにスプーンを準備したりしておいた。
- 子どもたちは、保育者に言われたからするのではなく、登園してくるとヤドカリの様子を見に行き、自主的に「水替えをしたほうがいいよ」と気づく姿が見られた。朝の会の後等に、自分たちでなめながら、「もっと塩を入れたほうがいい」「水をいれたほうがいいよ」「しょっぱいかな」「まだまだだよ」とお互いで話をしながら海水作りを進めていっていた。また、塩を加えたり、水を入れたりすることを交代で行ったり、役割分担しながらする姿が見られた。
- ・ この海水作りの時に、保育者として「こうしたほうがいい」などの声掛けはせずに、子どもたちの五感を使って、子どもたち自身が試行錯誤していく過程を大切にしていた。

〈後期・次年度に向けての計画〉

- ・ 飼育活動の過程で、自分たちが思ったことを他の子どもたちや保護者にも伝えていけるように、振り返りの記録を作っていく。
- ・ 粘土でヤドカリを作ったり、ヤドカリの動きを体で表現したりしてみる。
- ・ 秋の海や冬の海にもう一度出かけていくことによって、これまで捕まえることができたヤドカリがどうなっているのか観察していく。
- ・ ヤドカリだけでなく、他の海の生き物、さらには園庭にいる昆虫など、他の生き物への気づきへ広げていく。
- ・ 五感を使って感じたこと（海水作りなど）をもう一度科学的（濃度など）に検証し、試していく。

ポイント

「ヤドカリを飼うか、飼わないか」「飼えるのか」「どの水で飼うのか」「毎日水を取り替えられるのか」など、自分たちの経験や知識を出し合いながら、十分に話し合っただけで済ませたいと考えたため、さらに話を進めていった。



この後、子どもたちはヤドカリの死に直面します。この体験は、「同じ方法ではいけない」「ヤドカリをよりよく観よう」「表現したい」とさらに興味や思考を深め、生き物とのかかわり方や思いの表現を豊かにしています。生き物への思いやり、生命や命などにもつながる心情面や道徳性も培われています。この事例前文をご覧になりたい方は、プリントアウト用のファイルがありますので、こちらをご覧ください。